

今年の美術評論部門の賞を総なめした国際日本文化研究センター助教授

稲賀繁美

Inaga Shigemi

一生分の賞をもらったんじゃないかと

とにかく今年出版した『絵画の黄昏エドゥ

アール・マネ没後の闘争』は、まず「第十四回 沢・クロード賞」で、ルイ・ヴィトン・ジャパン特別賞を。次いで「第十九回 サントリー学芸賞（芸術・文学部門）」も。そして、今度は故・河北倫明氏にちなむ「第九回

紀後半のフランス絵画史の通説を塗り替えた力作だ。

「一生分の賞をもらったんじゃないかと、冷やかされてます」

ちようど四十歳。東京生まれ。東京大学大学院を出たあと、フランスに留学。パリ第七

倫雅美術奨励賞（美術評論・美術史研究部門）」と、美術評論、美術史研究といった部門の優れた著作に与えられる賞を、すべてさらってしまった。「近代絵画の父」といわれるマネが、どのようにして「大物」となっていたのか。その舞台裏をさらけ出し、十九世

大学で博士号取得。その過程で、十九世紀から二十世紀初頭に活躍した美術評論家、テオドル・デュレの研究に、首を突っ込むことになる。

「デュレを研究していると必然的にマネにたどりつく。マネといえば『印象派の兄貴分』



通説の舞台裏を検証

というのが世間の常識で、偉いのは当然とだれも疑問を持たない。マネの評価はデュレとその周辺の操作で高まったが、そうした裏面は知られていなかった。通説を支えてきた水面下の事情を、検証してみようという試みなんです」

「今回は自分なりに納得がいくだけ史料を集

めることができた」ので、この本も書けた、という。「受賞や取材攻勢にアジをしめると筆が荒れる、といわれてるから、しばらくはマスコミから遠ざかって、次の本に備えた」のだそうだ。